ちょっと名大史

241

もう１つの「愛知病院」―バングラデシュのアイチホスピタル―

名大史において愛知病院といえば、医学部の明治・大正期の前身にあたる医学校、医学専門学校、医科大学の臨床病院の名前が思い浮かびますが、海外にも名大と深い関わりを持つ「愛知病院」があります。

この病院を設立したのは、名大で学んだモアゼム・ホセイン博士です。1962年にバングラデシュに生まれたホセイン氏は、同国のダッカ大学医学部を卒業後、1991（平成3）年に名大に留学、大幸にあった医学部附属病院分院の伊藤喬廣教授（小児外科学、現名誉教授）の下で学び、1995年に医学博士号を取得しました。

帰国を前にホセイン氏は周囲の支援者たちに、子どもを無料で診療できる小児病院を母国に開設したいとの志を伝えました。当時のバングラデシュには栄養失調状態の子どもが多く、貧しく治療がうけられずに病気やケガなどで死んでいくケースが後を絶たない状況でした。小児科医や医療施設も非常に少なかったのです。

支援者たちは、山田静夫氏を会長、山田悦子氏を副会長として日本バングラデシュ友好協力会（JBCS）を組織し、その奔走の結果、愛知県内を中心に1千万円を超える寄附金が集まり、中古の医療機器も寄附されました。こうしてホセイン氏は、1996年5月、ダッカ郊外にアイチシシュホスピタルを開院したのです。

小さな4階建てのビルを間借りしてのスタートでしたが、JBCSの献身的な支援と愛知県内などからの寄附金や医療機器の援助を得て、多くの子どもに無償診療を行いつつ、規模を拡大していきました。1998年には総合病院アイチホスピタルとなり、2004年にはホセイン氏を理事長としてイーストウエスト医科大学及び同附属病院を設立、その後も発展を続けました。今やアイチホスピタルを中心とするアイチヘルスケアグループは、バングラデシュ屈指の医療グループに成長しています。

〔協力：日本バングラデシュ友好協力会〕

1　名大留学時代のホセイン氏（右）。
2　開院当初のアイチシシュホスピタルの前にて（ホセイン夫妻とその子息）。「アイチ」は愛知に由来し、「シシュ」はベンガル語で子どもの意味。
3　JBCSのメンバーとホセイン夫妻（2005年）。
4　バングラデシュの子どもたちを無償診療するホセイン氏（右端）。
5　現在、アイチヘルスケアグループ会長を務めるホセイン氏（2023年）。同グループは、アイチホスピタル及び3つの医療系大学のほか、日本企業との共同による病院・事業なども経営している。

BRIEF HISTORY OF NAGOYA UNIVERSITY

名古屋大学の卒業生、
現役・退職後の教職員の方々へ

名大史をつむぐ資料を
大学文書資料室に！

■ **在学時の配布物**
（学生便覧、シラバス、試験問題、課外活動の資料…）
■ **教育・研究活動、大学・部局運営に関する資料**
（各種書類、会議のメモ、備忘録、スクラップ記事、写真…）
■ **校費による印刷物・刊行物**
（冊子、パンフレット、ポスター…）
■ **ご退職関係の記念冊子・記念論集・業績集…　　など**

※その他、ご処分予定の資料についても、まずは下記へご一報ください。

東海国立大学機構大学文書資料室
TEL 052-789-2046
Mail nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp